



春の詩



文風 冴月

雨色信号機

雨の日の信号機は、何処かくすんだ色で光る。

鈍色の空に押し潰されないように、必死になってアスファルトに立ち、青、黄、赤とリズムを刻む。褪せた灰色の身体をすっくと伸ばして。

世界中の信号が赤になったら、きっと世界の全ては動きを止める。その時僕たちは息をぐっと止めて、時間が動き出すのを静かに待つしかない。赤く唸る信号に、まだかまだかと祈るみたいに。息を、ひっそりと、止めて。

けれど、いくら待っても心の中の信号機は色を変えない。ずうっと赤のまま。

今日こそは君に想いを伝えようと思ったのに。

気がついた時には、信号は黄色を示して、僕に注意を促す。

目の前の、現実の歩行者用信号機も、赤を灯している。雨に濡れて、雨色に染まった赤信号。僕に、止まれ！ と叫んでいる。

この気持ちを、君のことを愛する気持ちを、僕は今日も持て余すのだろうか。

厭だ。

走り出せ。

走り出したい。

走り出そう。

震える足に力を入れる。

雨に濡れたスニーカーから、視線を上げて、目の前の信号機の赤を睨む。

曇天の下。アスファルトの上。信号機と同じく、必死に地面に立つ。

この信号が青に変わったら、君に逢いに行こう。

この雨が晴れに変わったら、君に逢いに行こう。

雲の切れ間をぐっと見上げて、僕はそう誓う。

赤はまだ変わらない。

でも。

いつかは変わるから。

この雨がいつかは止むように。

走り出す準備だけ、しっかりしておこう。

ある歌姫役

孫娘が今年、幼稚園の年長さんになった。

年長になると、毎年秋に劇が催され、そこで演劇を披露する。

一人々々に役が与えられ、それはもう見るものに感動を与えるものらしい。

そんな素晴らしい舞台に、自分の孫が立つようになろうとは。

嬉しくもあり、どんどん自立していく姿に少し寂しさを覚えた。

「私ね、絶対に“歌姫”の役をやるんだ。すごく綺麗なんだよ、おばあちゃん」

「そうかい。頑張ってね」

私に出来ることは何もないけれど、この子ならきっと“歌姫”になれる。

私はそう思った。

「私の劇、見に来てね、おばあちゃん！」

笑顔でそう言うと、母親と一緒に孫娘は帰ってしまった。

時折、私のもとに訪れてくれる。それだけで十分だ。

次はいつ来てくれるのだろう、と想像するだけでなんだか幸せな気分になれる。

「私ね、“貧乏な町娘”の役になっちゃった……“歌姫”が、やりたかったなあ」

数日後、ひどく残念そうな顔をして、孫がやって来た。

“歌姫”の役は競争率がとても高いらしく、殆どの女の子がやりたがるのだそうだ。

結局、抽選に外れてしまった孫は可哀相なことに、“貧乏な町娘”の役になってしまったのだ。きっと、貧乏という言葉の意味すら、この子には解らないだろうに。

「せっかくおばあちゃんに、綺麗なところ見せるチャンスだったのに……」

「あなたはもう十分綺麗よ。それに、町娘が綺麗でない必要はないの。たっぷりおめかしなさいな。先生の言うことを良く聞いて――」

ゴホゴホと咳き込む。最近かなり激しく出るようになってきた。

すぐに看護婦がやって来て、孫娘は母親に手を引かれて帰ってしまった。

嫌なところを見られた。それだけが気残りだった。

あの日から、私の体調はみるみる悪くなっていった。

あれから一ヶ月が経つ。

今日が幼稚園の演劇発表会の日だ。

結局、孫の劇を見ることは出来なかった。

たとえ“貧乏な町娘”だろうと、孫の頑張っている姿を、一目見たかった。

眼を閉じると、必死につつかえないように台詞を喋る顔が浮かぶ。

私は心の中で、頑張れ、頑張れ、と精一杯に応援した。

あと一行、あと一単語、あと一音。頑張れ！

想像の中の彼女は、台詞を完璧に言い切って少し頬を朱に染めながら舞台の袖に消えた。

勿論、こんなものは私の勝手な妄想に過ぎないのだけど。

でも、今私がベッドに横になっている間にも、孫は頑張っているのだ。それは変わりようのない事実だ。

少し眠くなってきた。

瞼が重い。

瞼の裏には孫娘のあの笑顔が見える。

“歌姫”の役をやりたい、と語った時のとびきりの笑顔が。

気がつくのと、暗い世界を彷徨っていた。

ここは何処だろう。

ああ、そうか。

私は死んだのだ。

きっと、そうだ。

孫にさよならも言えなかった。

娘にすら言えていない。

全く最低の母親だ、私は。

遠くに花畑のようなものが見える。

ああ、本当に私は死んでしまったのだ、とそう思った時だった。

ふと、歌声が聞こえた。

音程がたまに外れ、テンポもずれている。

それでも暖かいそのメロディーは、その声は、

私の耳に、脳に、

心に響き渡った。

重い瞼が開く。

「あ、おばあちゃん、起きたー！」

視界いっぱい笑顔が咲き乱れる。

いつか見たとびきりの笑顔さをさらにとびきりにした笑顔だ。

傍らには医師や看護婦、私の娘が立っている。

「私ね、一生懸命歌ったんだよ、おばあちゃん。おばあちゃんに私の歌よ届け、って」

あの暖かい春のような歌はこの子が歌っていたのか。

死への恐怖など消え去ってしまうあの歌を。この子が。

私は最後の力で、口を開く。

擦れた音を集めて言葉にする。お願いだから、もう少しもって私の体。

「あなたの歌は、おばあちゃんにちゃんと届いていたわよ」

「うん！　だって、私はいつか“歌姫”になるんだから！」

幼いながらに理解しているのだろう。

孫の瞳からぼろぼろと涙が零れた。母親は何も言わない。それがこの子の為でもあるのだ。

「あなたはもう十分。立派な“歌姫”よ。だって、あんなにも素敵な歌が歌えるんですもの」

涙がふっと途切れる。驚いた顔で私を見た。

「あなたの歌を最期に聴けて良かったわ。また聴けたら良いのだけど」

「おばあちゃー」

私の意識はそこまでだった。

今度こそ本当に、死んだのだ。

それでも、私は毎日あの歌を聴く。

私のお墓の前で、もうあの時の泣き顔でない、私の“歌姫”が高らかに歌うのだ。

あの春のような光に包まれた歌を。

ある現像家（１）

友人に教えて貰った地図を頼りに、私は薄暗い路地にいる。
もう少しで目的地に着くはずだ。
本当に信じているわけではない。それでも、私の足は止まらない。
先へ、先へと、狭い路地を歩く。

程なくして、突き当たりにある建物へと辿り着く。
古びた看板が掲げられていて、「現像館F」と書かれている。
いたる所が錆びついたトタンで作られていて、風が吹いたら今にも崩れそうだ。
そう思う間にも風がびゅおっと吹いて、建物全体がギシギシ軋む。
チャイムのようなものが見当たらないので、ドアをノックする。あまり強く叩き過ぎると壊れそうで怖い。
少しするとガタガタとドアを軋ませながら、中から一人の男がひょこりと顔を出した。
ぼさぼさの黒髪に、丸い眼鏡の気の弱そうな青年だ。

その青年が、

「なに用で？」

森の中をひっそりと流れる小川のような声を出した。

うっすらと隈のある眼で私を見る。

私は勇気を出して口を開いた。

「こちらで助手を捜していると聞いたので……」

最後の方は尻すぼみになってしまう。我ながら情けない。

それでも青年は得心がいったらしく、

「ああ、そうですか。この仕事に興味がおありなんですか？ 特別お給料が良い仕事ではないんですよ」と説明してくる。

「友人に薦められたんです。私、あまり接客とかは得意じゃなくて……授業が遅くまであるから休日しか働けないし……って、すみません！ なんだか愚痴みたいになってしまっ」

つついっ心奥底にヘドロみたいに溜まった気持ちを吐露してしまった。恥ずかしいなあ。

「いえ、良いんですよ」

青年はぐしゃぐしゃの髪を更にぐしゃぐしゃと掻いて、

「それは大変でしたね。ウチで働きたいのなら、是非……そうそう、失礼ですが年齢はおいくつで？ 大学生でしょうか？」

あれ？ と私は思う。

なんか面接が始まっている雰囲気だ。

まさか玄関口で仕事の面接が始まるとは思ってもよらない。夢にも思わない。ていうかこんなところですか。

そんな私の様子に気がついたのか、青年は私を建物の中に招き入れた。

「すいませんねえ、散らかってますでしょう」

中は仄暗い。

裸電球がひとつ、天井に吊るしてあるだけだ。しかも今は光っていない。

靴を脱ぐスペースの先には畳が四畳半。布団が出しっぱなしで、しわくちやの毛布がこんもりと山みたいに佇んでいる。

奥の部屋が作業場で、この部屋が青年の寝起きしている所らしい。とても人が住んでいるようには見えないが、価値観というのは同じ国の中でもこんなにも違うのだなあ、と私はのほほんとしてしまう。

「さっきの質問の答えですけど、歳は十九で、大学生です」

答えながら、青年に薦められるまま私は薄っぺらな座布団の上に腰を下ろす。
差し出されたコーヒーに口を付けると、ひどくぬるい。不味い。
熱いのが冷めたのか、冷たいのが温かくなったのか、判断しづらい温度。むう。
「そうですか。では、貴女を『現像館F』に採用します。これから宜しく願います」
そう言うと、青年はぺこりと頭を垂れた。
私も慌ててお辞儀をする。
顔を上げると、ぼさぼさ頭の青年の顔がある。
「私のことはFとお呼び下さい。皆さんそう呼んでくれますから」
こうして私は「現像館F」で雇われることとなったのである。

「現像館F」はいわゆる写真屋というものだ。
お客さんが持って来たフィルムを現像する、あの写真屋だ。
だけど、ちょっと普通の写真屋とは違う。
その違いとは、このくたびれた青年、Fのある能力にあった。
そのある能力とは、フィルムを現像する時に写真としてではなく、本物として具現化してしまうというものだ。
最初は私も半信半疑だったが、助手としてFの手伝いをしている内に否が応でもその奇天烈さを思い知った。
今ではすっかり信じている。これはきっと超能力なのだ。
お客さんは滅多にやって来ない為、私がこなす助手としての仕事と言えばFの身の回りのことだ。昼食を作ったり、部屋の中を掃除したり。
しかも私は大学の講義にきちんと出席しているので、「現像館F」に行くのはたいてい土日なので、仕事としては楽だった。

そして、そんな楽な仕事をこなしてすでに半年が過ぎていた。
時間の経つのは早いなあ、などと感慨に耽っていると、老いたなあ、自分、なんて少し悲しくなってくる。

その短い様で長い時間の中で、いろいろあった。
たくさんものを現像した。それはもう数え切れないくらいに。
いつからだったのだろう。
私はもう何百回も繰り返した自分への質問に、つい笑ってしまう。
でも本当に、いつからだったのだろう。
私はいつしか、あのFに恋をしていた。
不思議だ。奇天烈だ。どうしてあんな男に魅力を感じているのだろう。
自分でも判らない。

ある現像家（２）

Fは今日も変わらずにぼさぼさに伸ばした髪に、丸い縁の眼鏡。

ちらりと横顔を盗み見る。

特別にかっこいいって訳じゃないんだけどなあ。

でもなんだか安心できる、そんな顔。

「今日はもう誰も来ないだろうから、もう帰っても良いですよ」

Fは窓から外の薄暗い通りをちらっと見て言う。

遠くに沈み行く太陽が見える。そうか、もうこんな時間か。

「そうですね、って言ってもこの頃、全然お客さん来てくれなくてねえ」

「まあ、いつも通りでしょう？」

Fはそう言って、何が楽しいのか笑った。私もつられて笑う。

Fの声は半年前と変わらずに、そよそよと流れる小川の様な響きを持っている。

綺麗だな、って思ったら急に恥ずかしくなった。

「そ、それじゃあ、私もう帰りますね」

「ああ、それでは。お気をつけて」

さらっと言って、Fは奥の作業場へと消える。

むう、空気の読めん奴め。

寂しさを紛らわせようと、勢い良くドアを開けて外に出る。

半年前みたいにドアはもう軋んでいない。

私が頑張って直したのだ。日曜大工ってやつである。

どうして男のFがやらないで女の私がやらなきゃならないんだろうか、という疑問はフェミニズム精神に則ろうじゃないか。ていうか、則らないとやっていけない。

家に帰るまでは徒歩で十五分ほど。

近すぎず、遠すぎずな距離。

まあ、これもいい運動なのだ、と腕を振って私は歩く。

ふと鞆に入れておいた携帯電話が震えた。

友人からのメールだった。

高校時代の先輩が結婚するらしい。いやはや。

結婚式かあ、きっと素敵な式場でやるんだろうな。

式場、か。

そうか。

翌日、私は近くの教会に来ている。

白い外観、広く清らかな内装。

こんなところで挙式を挙げたら、なんて考えると頬が緩む。

勿論、それは不可能なことではないのだ。

私の手にはカメラが握られている。

これでこの教会内を隅々まで撮影して、“現像”すれば……。

なんて考えると本当にだらしな顔になってしまう。いけないいけない。

人に見つからない内に、と私は次々に写真を撮る。

それに、善は急げ、もたもたしている時間が勿体無い。

早く写真を撮り終えて、「現像館F」に行きたい。

このフィルムを現像すれば、いくら鈍感なFでも気づいてくれるはずだ。多分きつと恐らく、そう……だと、良いな。

「現像館F」に着いた頃には、もうすっかり夕暮れだった。

あの後すぐに帰ってくれば良かったのに、欲張って写真をたくさん撮っていた私は警備のおじさんに見つかってこってり絞られた。

写真の勉強をしていて……と言い訳をしてみたけど、無断で教会内に入って良いことにはならないよなあ、と自分でも溜息をついた始末。

そんなこんなで今に至る。

もう太陽が沈んじゃうじゃんか。

その上、まだフィルムは撮り終えていなかった。恐らくあと一、二枚といったところだろう。

願わくば、Fを撮りたかった。そして、その写真を部屋にでも飾って……。

そんな下らないことを考えていると、どんどん時間は過ぎていく。

やっぱり明日にしようかな。いやでも明日は授業あるし。よし、今日にしよう。でもでももうこんな時間だし……とブツブツとドアの前で呟いていたら、ドアがいきなり開いた。

「どうしたんです、さっきから。もう日も暮れますから入ったらどうですか？」

さっきから、ってことは気がついてたのかな。むう。

だとするとかなり恥ずかしい。ていうか変質者じゃないか、私。

頭の片隅でそんなことを考えつつも、私は取り敢えず中に入った。

いつの間にか体が冷え切っていて、寒かった。

差し出されたコーヒーは温かかった。

少し苦いその黒い液体を口に含んだ時、Fが口を開いた。

「そう言えば、私、結婚することになったんですよ」

「っ……！！」

思わずコーヒーを盛大に吐き出すところだった。

でもそこは乙女の底力でなんとか持ち応える。

「さっき親から電話がかかってきましてね。イイナズケって言うんですか。だいぶ前から決まっていたそうなんです」

Fはまるで隣の家で飼っている猫が子供を産んだんだって、とでも言うようにさらりと言っただけ。

なんだそれ。なんなんだそれ。

私の今日一日の苦労は何処へ行った。

ドラマとかだったら、そういった親の決めた結婚を撥ね退けて私と結婚してくれるのかも知れないなあ、と他人事のように考える。

「……そ、そうだったんですか。それは、よ、良かったですね！」

それでも、私は精一杯の笑顔で祝福した。

瞳の端っこに滲んでいる雫は、嬉し涙なのだ。そうなのだ。

「ありがとうございます。貴女には悪いんですが、この『現像館F』も店じまいしなくてはならないんですよ」

「そう、なんですか……」

ぼさぼさの髪をくしゃくしゃと搔いて、Fは言う。

「今月分のお給料はお出ししますから」

違う。私はそんなことどうだって良い。

お金なんてどうだって。

でも、心の中の言葉は、一ミリも空気を震わせない。

私はうな垂れた。すると、首からかけていたカメラが目映る。

教会の写真、いらなくなっちゃったな。

ん、そうか、この教会をFに使って貰おう。そうすれば、ちょっとは気が晴れる。

「そうだ、今日たまたま教会の写真を撮って来たんです。これを現像して、挙式会場として使って下さい」

「ああ、そうだったんですか。それは嬉しいですね、是非使わせて貰いましょう」

眼鏡をくいつと直しながら、Fは笑顔で言う。

まったく、最後までなんて良い笑顔をするのだろう、この男は。

「まだフィルム終わっていないんで、写真撮っても良いですか？」

「良いですよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言って私は、カメラをFに向ける。

少し慌てたFが、

「え？ わ、私を撮るんですか？」

「最後の、記念に……ダメですか？」

“最後”というワードに反応したのか、Fは渋々撮られることを承諾した。

ファインダーを覗き込む。

少し澄ました表情のFがいる。

ずっと思い焦がれていた。あのFを写真に撮ろうとしている。

でも、Fの挙式のことを考えると、ピントがぼやけてしまう。

私の撮った写真は無駄にはならないだろうか。私の写真たちよ、Fの奥さんに宜しく。

視界がぼやけたまま、シャッターを切った。

フィルムが巻かれていく。

終わったんだ。うん。

フィルムをカメラから取り出して、Fに投げる。

ふわっと放物線を描き、重力に引かれてFの手の中にすっぽりと収まった。

「それじゃあ、ちゃんと現像して、使って下さいね！」

私はそれだけ言うと、「現像館F」のドアを開けて、外に出た。

そして、思い切り駆ける。

きっとFは私の気持ちには気がついていないんだろう。

それでも、私は精一杯の笑顔で走った。

瞳の端っこに滲んでいる雫は、誰がなんと言おうと嬉し涙なのだ。多分。

今はそういうことにしておこう。

冬だった。

まだあの頃は窓の外で、純白の雪がちらほらと灰色の空を泳いでいた。

暖房の効き過ぎた部屋は、私の頭をぼーっとさせた。いや、それは暖房の所為ではなく、私の患っている病気の所為もあるのであった。

初めは厭な咳が出るな、と思う程度だった。けほけほと芯が抜けた様な掠れた咳だった。

その内に吃驚する程の高熱が出た。立っているのも辛く、私は自分のベッドに身体を委ねるしかなかった。

混濁した意識の中で夢とも現ともつかないものを、毎日毎日働かない頭で見っていた気がする。

自分の部屋をぼんやりした瞳で見渡すと、窓からは庭に植えられている一本の木を眺めることが出来た。その木は林檎の木だった。

冬なので葉が数枚しか残っておらず、淋しい枝が雪風に揺れるのを私は考えの纏まらない頭を抱えつつ目で追っていた。

そんな中、私の部屋に一人のお医者さんがやってきた。男性の割に身長は余り高くなく、歳は二十代の後半くらいだろう。もっと年配のベテラン先生が来ると思っていたから少し吃驚した。

白衣に包まれたその先生は、ついさっきまで雪の中にいたのではないかと疑うくらいに肌の色が白かった。とても健康的な白さだった。

私も肌の色は白い方だけれど、今は不健康な白さで白濁した色合いに朱をさした色になってしまっていた。

彼は毎日私の部屋にやって来て、薬を調合して私に飲ませようとした。薬は苦いから嫌いだ。上手く回らない頭でそれだけは強く思った。

先生がやってきて、半月が経っても私の病気は一向に良くならなかった。寧ろ厭な咳は悪化していた。咳をするたびに胸が締め付けられる様に痛み、目元に涙が滲んだ。

毎日ベッドの上で何を考えともなしに寝ていた。起きている時は窓の外の林檎の木を眺めるか、薬を調合する先生の長い綺麗な指を目で追うだけだった。

一日に林檎一個で医者要らず、なんて諺があるけれど、本当にそうなのだろうか。私の目の前で熱心に薬を調合する先生と、真っ赤で甘い林檎とでは勝負になるのだろうか。ならないだろうなあ……。

ふと窓の外に視線をやると、林檎の木には何の実もぶら下がってはおらず、数枚の葉が風に揺れていた。あの葉が全て散る頃には私の病気は治っているのだろうか。不安になって、布団を目元まで引き上げて涙を隠した。林檎の木に涙を見せたくはなかった。それと先生にも。

ある吹雪の日、夕方になっても先生が来ないことがあった。この吹雪では到底外は歩けまい。きっと今日はお休みなのだ。そう思うと、少し淋しくなった。

夕食の時間の少し前になって、ドアがノックされた。お母さんかなと思い、入るように促すと、現われたのは白衣の先生であった。顔がとても赤かった。

「ご免な、遅れてしまって」

彼は開口一番にそう言った。まさか本当にこの吹雪の中をやってくるとは。

「薬草がちょうど切れてしまっていてね。捜すのに苦労したよ、ここいらには生えていないものだから」

震える先生は両手を擦り合わせて、はあっと息を吹きかけていた。

真っ赤に霜焼けした両手がとても痛々しかった。

ベッドの横の椅子に腰掛けて、

「すぐに薬を作るからな。今からなら夕食後には間に合うから」

先生はそう言うと早速、薬の調合に取り掛かった。

そして、薬はきっちり夕食後に間に合った。今日の薬は、勿論いつも通り苦かったのだけれど、不思議と我慢して飲めた。

薬を飲んで一息つくと、横に座って必死に何かメモを書いている先生に、

「どうして、ここまでして下さるんですか？ この吹雪の中で薬草を探したり……どうして、私なんかの為に……」

申し訳ない様な、それでいて嬉しい様な不思議な気持ちで尋ねた。先生はきょとんとした後に笑って言った。

「僕は医者だ。そして、君は僕の患者。医者が患者の為に尽くすのは当然だよ」

その笑顔が消える前に、もう一つ訊いてみた。

「じゃあ私のこの病気、治して貰えますか？」

私の不安を消し飛ばす様に、先生は更に笑顔で言った。

「勿論さ。病はきっと治す。約束するよ、僕は医者だからね」

そして、その日から二週間後、私は手術を受けた。

なんでも、私の病気は肺に関する重い病だったらしく（両親や先生は詳しくは教えてくれなかった）、手術するしかないとの事だった。

手術は無事に成功した、らしい。

らしい、というのは自分でも良く解らないからだ。

もう厭な咳は出なかった。両親は手を取り合って喜んでいた。

先生は、あとは君の体力次第だから、といって私の部屋を後にした。

私の部屋に来るのは、一週間に一回、術後の様子を見に来るだけになってしまった。そして、私の体調はすこぶる良好だったのだ。

然し、私は自分の身体の異変に気づいてしまった。

胸が苦しい。

手術は成功した筈なのに、頭はぼーっとするし、呼吸し辛くなる時があった。またあの生活に戻ってしまうのだろうか。

あれだけ喜んでいた両親には打ち明けたくない。それに先生にも。折角の手術が失敗したかもしれない、とは思って欲しくない。

ふと窓の外を見ると、相変わらず林檎の木が風に揺れていた。まだ庭には雪がちらほらと残ってはいるが、もう冬も終わりなのかもしれない。

林檎の木に残る葉は一枚になってしまっていた。あの最後の一枚が散った時、本当に私は死んでしまうのではないか。もう健康な身体には戻れないのではないか。そう考えると、すごく悲しくなった。

風が吹いて窓ガラスがぎしぎしと軋む。

その音がやけに悲しい音色で、なんだか感傷的な気分になってしまう。

それもこれもこの病気の所為だ。如何して治らないのだろう。悲しい。淋しい。悔しい。切ない。

そんな時に脳裏に浮かぶのは先生笑顔だった。

きっと治すって、約束したのに。

「……先生の、嘘つき」

知らず、ぼんやり呟いていた。

「誰が嘘つきだって？」

振り返るとドアの傍に先生が立っていた。手にはバスケットを提げている。

いきなりの訪問に驚いてしまって、口ごもる。

「え、えと……」

目に見えてしどろもどろになっている私に、先生は優しく語り掛けてくる。

「調子は如何だ？」

「あ、はい、えっと……大丈夫、です」

嘘つきは私だ。

本当は全然良くなってなんかいないじゃないか。咳が出なくなったただけだ。それ以外は前と変わらない。胸は苦しいし、頭の回転も鈍い。

「これ、差し入れの林檎だ。いつも林檎の木を見ていたから、食べたいのかと思って」

差し出されたバスケットの中には三つの真っ赤な林檎が入っていた。血を連想させる鮮やかな赤。

ベッド脇の机にバスケットを置くと、先生は椅子に腰掛けた。

先生と目を合わせるのが気まずい。嘘がばれてしまうかも知れない、そう思うと顔を上げるのさえ気後れしてしまう。

「胸、痛むのか？」

「え？」

その言葉には驚いた。如何して解ってしまったのだろう。

「俺だって医者だぞ。患者の体調が本当は如何なのか、なんてのはすぐに解るんだよ」

何も言えないでいると、先生はいきなりこうべを垂れた。そして、大きな声で謝った。

「すまん、俺の所為だ。俺の手術は、その、失敗だったってことなんだよな」

「せ、先生、顔を上げてください！ 違うんです、先生の所為なんかじゃ……！」

「でも、まだ胸が苦しいんだろう？」

「うう……そ、それはそうなんですけど。でもでも、先生の所為じゃありません。だって、先生は私の為に薬を作ってくれたり、私の為に手術を考えてくれたり……それに、私の為にこうして謝ってくれるじゃありませんか」

先生は顔を上げると、それでも何か言いたそうで。だから彼の口が開く前に私は言った。

「確かに胸は以前の様に苦しいんです。それに頭もぼーっとするし、何かを考えるのが困難で……でも、先生は悪くありません。先生は——」

でも、私の言葉は途中で途切れてしまった。がっしりと肩を掴まれて、一瞬だけ視線が交錯した。

「良いんだ……もう良いから」

弱々しく呟く先生の手から力が抜けて、肩にかかっていた圧力が消える。

何が『良いんだ』ろうか。何も良くなんかないのに……。

先生の瞳は罪悪感と後悔とその他色々な感情が入り混じった切ない色をしていた。

その時、私は気づいた。自分の病気に。

気づいてしまったらなんてことはなかった。ああ、もっと早く気がつけば良かったな、と思うと同時に、まだ気がついていない先生にいじわるしてやろう、とも思う自分がいた。

「……解りました。私、たった今気がつきました。自分の病気に」

怪訝そうな先生に、ふうっと大きく息を吸い込んで力強く宣言する。

「これはきっと恋の病です」

「こ、恋の病……？ ううん、でも、相手は誰だろうね。学校の友達かい？ それとも近所の……」

先生はぶつぶつと私の恋の相手についてあれこれと考えている。やっぱり先生は気づいていない。少し淋しく、それでいて嬉しい、そんな気分だ。

「ねえ、先生」

ゆっくりと呼びかけると、首を捻って思案していた先生が私を見る。見てくれる。

「私のこの病気、治して貰えますか？」

「勿論さ、と言いたいところだけど、恋の病か……ううむ」

まだ気がつかないのか、この鈍感先生は。そう思っても直接言うのはやっぱり恥ずかしい。

「『病はきっと治す』って、前に先生はそう約束してくれました」

約束、という言葉に反応したのか、先生は真面目な顔になって頷いた。けれどすぐに不安な顔になって呟いた。

「僕に治せるかね」

無意識の内に言葉が紡ぎ出される。自分の心の奥底から溢れ出てくるのだ。だから、言った。

「医学的根拠の全くない初心者の意見ですけど、きっと先生にしか治せないと思います」

すると、先生は何か気づいたのか、顔が徐々に赤くなっていった。

「ええと……あ、ああ、そうだな……約束するよ。うん、治してみせるさ」

先生の顔はもう燃え出すのではないかというくらいに真っ赤で、それはきっと自分もそうなんだろうなあ、とぼんやりと思う。でも、顔が熱いのは病気の所為なのだ、きっと。

私たちは林檎の様に互いに顔を赤らめて、ばしばしと風が音を立てて叩く窓の外を眺めた。

最後の葉がゆらゆらと揺れている。

あの葉が散るのと一緒に季節は巡る。真っ赤な実を結ぶ為に林檎の木は悠然と風に揺られている。それはなんとも逞しい自然の姿だった。

庭に積もった雪が、暖かい日差しの眩しさの中で笑っている様に見えた。

雪が溶けて冬が去り、春がやってくる。

風が吹いた。雪の細かな粒が空に舞い上がる。

それは一瞬だった。

私たちの目の前で、林檎の木に必死にしがみついていた最後の葉が寒風に舞った。散ったのだ。

最後の葉が散ったらうんぬんというのは迷信なのだ。勿論、そんなことはちゃんと解っていた。葉が散ってしまったって私も死ぬことはなかった。

それでも、死んでしまう程に嬉しかったのは、私の隣に先生がいるからなのかも知れない。

白ずきん（１）

森を抜けたところに一人で住んでいるお婆さんが体調を崩しているということで、お母さんは娘の白ずきんにお見舞いの品を持っていくように言いました。

白ずきんはお婆さんの体調のことを聞いてとても心配になりました。なので、さっそくバスケットに葡萄で作った飲み物と焼きたてのパンを入れて家を出ました。

「くれぐれもお婆さんに無理をさせてはいけませんよ」

お母さんは颯爽と駆けていく白ずきんに言いました。

白ずきんは笑顔で返します。

「うん、行って来ます！」

白ずきんが風に揺れて、輝きました。

お婆さんの家までは一本道ですから、子供の白ずきんでも迷うことなく行けます。

鬱蒼とした森の道を、木々の枝を避けながら歩いているうちに、白ずきんの綺麗な白色が段々と森の色に染まってきます。

途中、木の上で栗鼠が二匹座って休んでいました。

「あや、珍しい。人間の子供だねえ」

「おや、香しい。パンの匂いだねえ」

二匹の栗鼠は白ずきんの持つバスケットの中身に興味津々です。

白ずきんはバスケットを隠すようにして言います。

「これはダメよ。お婆ちゃんに差し上げるんですもの」

栗鼠たちは懲りずに言い返します。

「でも、少しくらい良いじゃないの」

「そう、僕ら胃袋は小さいのだから」

白ずきんはそれでも首を横に振ります。

そして、お婆さんが風邪をひいてしまって苦しんでいることを伝えました。それから、このパンはお婆さんに上げるものだ、ともう一度説明しました。

それを聞いた栗鼠たちは急に恥ずかしくなって、

「ああ、ごめんよ、なら要らないよ」

「そら、いそいで、届けてあげてよ」

そう言うと、枝を伝って何処かへ行ってしまいました。

白ずきんは少し淋しくなりましたが、早くお婆さんにパンを届けなくちゃ、と思いまた歩き始めました。

森を抜ける頃には、白ずきんの色は完全に森の色でした。

緑、黄緑、深緑、群青、藍、茶色、灰色、とまるで兵隊が着る迷彩服のようです。

白ずきんはなんだか元気が湧いて、スキップなんて始めました。

軽やかにスキップで進んでいた白ずきんがふと、立ち止まりました。

ポツポツと雨が降り始めたのです。

「いけない、大事なパンが濡れてしまうわ」

白ずきんはバスケットの中身が雨に濡れないように持って、近くの大きな木の下まで走りました。

雨が止むまでここで待つつもりです。

「良かった、パンは無事みたい」

パンが濡れていないことを確認すると、白ずきんはほっと息をつきました。

白ずきんのずきんは、さっきまでの森色ではなく、今はすっかり雨色でした。

着ているだけで風邪をひいてしまいそうな色です。

暫く経つと、雨は止みました。

雲の合間から一条の太陽光が差し込んできます。

「さあ、雨も止んだことだし。いそいでお婆ちゃんの家に行かなくちゃ」

白ずきんはバスケットを手に持ち、また歩き始めました。

空には綺麗な虹も出ています。

しかし、歩を進める白ずきんはその虹にも気がつかない様子でした。

お婆さんの暮らす家まではあと少しなのです。

数分後、白ずきんは漸くお婆さんの家まで辿り着きました。

ドアをノックして、お婆さん呼びます。

少し遅れて寝巻き姿のお婆さんが出てきました。

お婆さんは白ずきんの姿を見ると、驚いて、

「まあまあ白ずきん、一人でいらしたの？」

「はい、一人で来ました」

そう言うと、白ずきんはにっこりと笑いました。

お婆さんはその笑顔にふふっと笑い、あることに気がつきました。

「あら、今日は綺麗な色のずきんまで被っているのね」

「えっ？」

白ずきんは自分のずきんの色を見て驚きました。

綺麗な虹色に染まっていたからです。

いそいで空を見てももうそこには虹は在りませんでした。

「中に入って、白ずきん。お茶にしましょう」

「もうお体の具合は良いんですか？」

「ええ、だいぶ良くなったの」

「これ、葡萄で作ったジュースとパンです。お母さんが作ってくれたの」

「あら、じゃあきつと美味しいわね」

お婆さんの言葉は本当で、もう風邪も治ってしまっているように白ずきんには見えました。

白ずきんはお母さんの焼いたパンと葡萄のジュースを飲んで、お婆さんとお話をして過ごしました。

日が傾き始めて、白ずきんはそろそろ帰ろうと思いました。

お礼を言って立ち上がると、お婆さんは目を細めて言いました。

「まあ、今度は何色に染まったのかしら。とても、ええ、とても心に響く良い色ね」

白ずきんのずきんは、見たこともないような綺麗な色に染め上がっていました。

白ずきんも思わず息をついて、見惚れるほどでした。

「これはきつと、お婆ちゃんの笑顔の色です。だって、こんなにも綺麗なんだもの」

得心したように、白ずきんは言いました。

でも、お婆さんは首を振ります。

「いいえ、これはお婆ちゃんのだけじゃないわ。貴女のも混じっていなければこんなにも綺麗な色には染まらないもの」

「じゃあ、お婆ちゃんと私の笑顔の色なんですね……なんて素敵な色なのかしらん」

うっとりとして、白ずきんは呟きます。

「今日はどうもありがとう、白ずきん。美味しいものも貰ったし、良いものも見せて貰ったし……またいつでもいらっしやい」

お婆さんはにっこりと笑って、手を振りました。

白ずきんも手を振って、家を後にしました。

白ずきん（2）

外はもう夕暮れです。

白ずきんはこの綺麗な色のずきんをお母さんにも見せてあげようと思って、いそいで家に向かいました。暗くなった森は危ないので、少し遠回りになるけれど、白ずきんは安全な迂回路を走ります。

息が切れても、足がもつれても、この素敵な色をお母さんに見せたい一心で走りました。

地平線に消えようとする太陽が、後ろから白ずきんの背中を押します。

太陽が地平線の彼方に半分くらい顔を埋めた時、やっとの思いで白ずきんは家に着きました。

勢い良くドアを開けると、キッチンではお母さんがグラタンを焼いていました。

こんがりの良い匂いが漂ってきます。

「おかえりなさい、白ずきん」

「ただいま。まあ、良い匂い……つと、そうじゃなかった」

白ずきんはよだれを拭くと、

「お母さん、これ見て、これ」

そう言うと、自分のずきんを見せました。

きっとお母さんもあの素晴らしい色を見れば喜んでくれるはずだ、そう思うと笑顔が零れてしまいます。

「あら、綺麗に染まっているわねえ。まるで赤ずきんみたいね、うふふ」

「え？ ……………って、わああ！？」

白ずきんは自分のずきんの色を見て愕然としました。

「どうしたの、そんな大きな声出して」

「だって、だって」

ずきんは先程までの綺麗な笑顔色から一転、夕焼けの真紅に染まってしまっていました。

白ずきんはひどく悲しくなりましたが、その反面、これで良かったのかも、とも思いました。

「あの素敵な笑顔色は、私とお婆ちゃんだけの秘密にしておこう」

白ずきんは納得して、一人でうんと頷きました。

そんな白ずきんを見て、お母さんは訝しげに訊きます。

「どうしたの、嬉しそうな顔をして」

白ずきんは、自分とお婆さんだけの秘密を持てたこと、何も知らないでキョトンとしているお母さんのこと、今日一日でちょっぴり世界を知った自分のこと、森の中でひっそりと暮らす栗鼠のこと、夕焼けの赤色も十分に綺麗だということ、それらを思うとどうにも笑顔が溢れてきて、それを必死に堪えながら、けれども、笑顔で言いました。

「ふふ、お母さんには内緒っ」

ずきんの色が、また幸せな笑顔色に染まりました。

幼い頃、空耳という言葉を知って最初に思ったのは、空にも耳があるのかあ、といういかにも頭の足らないことだった。

私が空耳という言葉の意味を知るのはそれから数年後のことになるのだが（そこ、遅いとか言わないの）、これは私がまだその意味を知らなかった時の話だ。

私の生まれた家は決して裕福な家庭でなかった為、両親は共働きであった。毎日、夕方を過ぎないと親は帰って来ない。

小学校から帰っても、勿論誰もいない部屋はシンと静まり返っていた。冷蔵庫の唸る音がやけに大きく聞こえて、何度か泣いた。

そんな時だった。

空耳という言葉が、空に耳がついていることなのだと信じていた私は、うっすらと雲のかかる春の空を見上げた。太陽が西に傾き、空全体を淡い橙色に染めていた。

「ねえ、お空さん。お母さんはいつになったら帰ってくるかなあ……」

橙に染まった空は、何も言わずただただ大きく両腕を広げているだけ。

ポツリとした私の眩きは、天高くまでは届かなかったのだろうか。

もう一言、言葉を紡ごうとした時、玄関の扉が開く音がして母が帰ってきた。

「おかえり、お母さん」

私は笑顔で、空を走る飛行機雲を見つめた。

それから、私は寂しい時や何か困った時には空に話しかけていた。それは家で両親の帰りを待つ時だとか、かくれんぼで自分一人をみんなに置いて帰られた時とか、母に買って貰った熊のキーホルダーを失くして捜し回った時とかだ。

私の声が空の鼓膜を振るわせてくれることだけを願って。

幼い私は、本当にそんなことを考えていた。

空は全てを見ていて、私の言葉を聴いてくれるのだと。

曇天のある日、私は本当に独りになった。

両親が死んだのだ。

二人の乗っていた電車が脱線事故を起こしたのだった。

小学校高学年になっていた私には、その意味がすぐに解った。もう母にも父にも逢えない。

頭ではすぐに理解したけれど、心では理解できなかった。

訃報を電話で受けた私は、力なく窓辺に凭れた。

鍵のかかっていなかった窓はカラカラと音を立てて開いた。

私は裸足のまま庭に出る。

ふと視線を上げると、そこには当たり前の様に空があった。

「お母さんも、お父さんも……死んじゃったんだって」

私の声が虚しく空気に溶ける前に、空からは無数の雨粒が降ってきた。

まるで、私を慰めるみたいに。

まるで、空も悲しむみたいに。

まるで、両親の想いみたいに。

雨はそっと降り注ぎ、私を優しく包み込んだ。

あれから十数年。

長いようで、短い月日が過ぎ去った。

私は毎日、空に向かって話しかけていた。学校であったことや、面白かったこと、料理が出来るようになったこと、高校に受かったこと。それこそ何でも話した。

勿論、空耳の言葉の意味なんて知っている。それでも、私には空に語りかけるのがやめられなかった。

だって、空はいつでも我が物顔でそこに居てくれるから。

それに、空は実際には耳を持っていて、私たちの言葉を聴いているかも知れないから。

それに――

「それでは、新郎新婦の入場です！」

その声には私は我に返る。隣を見ると、私の夫になる人がにこりと笑いかけてきた。

うん、と頷いて、教会の扉の前で一瞬立ち止まる。

そして、蒼い空を振り返って呟いた。

「行ってくるね、お母さん、お父さん」

ギギッと音を立てて開いた扉を眺める。

彼と一緒に足を一步踏み出したその時、

「行ってらっしゃい」

私の耳を、優しい音と共に風が掠めた。

慌てて振り返るけれど、勿論、そこには私の両親なんて居やしない。

これが本当のところの空耳なのだろうな。

冷静に考えてみても、少し涙が出た。

十数年。

長いようで、短い月日が過ぎ去った。

私は毎日、空に向かって話しかけていた。

勿論、空耳の言葉の意味なんて知っている。つまりは幻聴ってことなのだろう。

でも、たまには幻聴というのも良いものだ。

空耳の言葉の意味を理解しても、私には空に語りかけるのがやめられなかった。

だって、空はいつでも我が物顔でそこに居てくれるから。

それに、空は実際には耳を持っていて、私たちの言葉を聴いているかも知れないから。

それに、

それに空は、天国の一番近くにあるから。

雨の由来

ある日、空を飛べることに気がついた。気がついた、というより気がついたら空を飛んでいた。

実際には、“宙に浮く”という表現が近いかも知れないけれど。だって、羽ばたく為の翼なんて生えていなかったから。

それでも、私の身体はふわりと浮かび上がり、校舎の屋上を越えて、白線が年輪の様に描かれた校庭を一望出来た。

友人たちがいつもより小さく見えた。なんだか楽しくなって、ふわふわと青い空に身を任せた。スカートの下にハーフパンツをはいていて良かった、とぼんやり思った。

次の日からの友人たちの目は異質だった。

奇異の目。

まるで私を人間以外の何かを見るような視線で眺め回してくるのだ。

昨日はふわふわと空を飛んで家まで帰ったから、飛ぶことに関してはもうそこいらの鳥に負けない位の腕に上達していた。そして、それが原因で何人もの人に私が空を飛ぶのを目撃された。

ひそひそとクラスのあちこちで音にならない陰口が囁かれる。

如何して？

私は悪くないのに。

たまたま空を飛べた、ただそれだけなのに。

居心地の悪い教室から、出て行きたかった。

授業なんて構わずに、あの窓を開いて自由な空へと飛んで行きたかった。

それからは空を飛ぶことをしなくなった。あの一日以来、私は人前で飛びたくはなかった。

でも、一度根付いてしまった怪訝な視線は、そう簡単には拭えなかった。

あれから二ヶ月位が経った。

ぶらぶらと街を歩いていると、急にけたたましいサイレンの音が聞こえた。火事だ、とすぐに解った。ビルの合間に黒い煙が黙々と立ち昇っていた。

野次馬の波に流される様に、私は燃え盛るビルの近くまでやって来た。本当は珍しいもの見たさでこんなところに来るのはいけないことだと思ったけれど。

道が混雑していて、なかなか消防車が到着しない。

サイレンの音はまだまだ遠い。

ふと野次馬たちから悲鳴が上がった。みんなの視線の先には、燃え盛る最上階の窓から助けを求める人の姿があった。真っ赤に染まったビルは6階建てで、逃げようと飛び降りて助かる高さでは到底ない。

消防車はまだなのだろうか。野次馬の不安が膨張する。

私も汗が滲む掌を握り締める。

私が空を飛べば、あの人を助けることは出来るだろう。

でも。

周りには大勢の人たちがいる。当然、空を飛べばみんなに私が異質だっていうことがばれる。

でも。

この力はこの日の為にあつたのかも知れない。

だったら。

だったら私は……。

「な、なんだ、あの子は！」

「飛んでる！ 飛んでるわ！」

久しぶりでも、私は上手く飛べた。群集の中からひょいと飛び出せた。

ぐんぐんと私の身体は速度を増し、異常なまでに熱い建物目掛けて空を駆ける。

空気の抵抗なんか気にならない。周りの人たちの声も視線も気にならない。

ただ、あの人を助けたい。早く安心させてあげたい。

だから……。

窓から助けを求めている人の傍まではすぐに辿り着いた。近くに来てやっと解ったけれど、相手は大学生くらいの女性だった。

「さあ、早く私に捕まってください！」

熱さに負けないで手を伸ばす。

窓からは火事の熱気と黒い煙が溢れている。

早く助けてあげなくちゃ！

でも彼女の反応は私にとって最悪なものだった。

奇異の目。

恐怖の目。

それはそうだろう。

なんで気がつかなかったのだろう。

普通の人間は空を飛ぶことなんてしない。

明らかに私に怯えている彼女は、来ないで、と絞り出す様に呟いて後ずさりした。

厭だ。如何して。折角助けに来たのに。ここにいたら危ないのに。早く逃げなきゃ。そんな目で見ないで。厭だ。

厭だ。如何して。如何して。如何して――

「ほら、そこどいてどいて！ 邪魔だよ、君！」

野太い声が後ろから聞こえた。

振り向くと銀色の戦闘服を着た消防士さんがいた。消防車が漸く到着したのだろう。炎の様に真っ赤な消防車から伸びた梯子が地面から伸びている。

普通の人間は空を飛べない。こうやって地上と空中を繋ぐ足場がなければ、人間はただっ広い大地を這い蹲るしかないのだ。

消防士が女子学生を助け、ビルの炎を消し去る迄、私は呆然として見ているだけしかなかった。

ただ飛べるだけの子供が、人を助けることなんて出来ない、と言外に突きつけられているみたいだった。

遥か下では、野次馬の中に火事から逃げ切った大勢の被害者たちがいた。救急車の到着が遅れているのだ。

あの女子学生の姿も見える。消防士に涙ながらに感謝している。

消防士は毅然としていて、それがまた野次馬たちの拍手を誘うものになっていた。

別に感謝されたかったわけではない。だから、心の中で渦巻いている真っ黒の感情は嫉妬なんかじゃない。

私はただみんなと一緒にいたいだけ。

あの輪に入って、助かって良かったですね、と笑い合いたいだけなのに。

それが出来なかった。

私の身体は空を飛べるくせに、地面で犇んでいる人たちに混じることなんて出来ないで、ぶかぶかと空に浮いていた。

私のこの能力は「空を飛ぶ」というものではないのだ。今なら解る。

これはきっと「斥力」。

何かを離れ離れにする能力。

私は人の輪から外れたのだ。

何も考えられず、ただただ空を昇っていく。

誰も私の存在など気にも留めない。

蒼くて広くて、自由な空を目指して浮かぶ身体。

それは、地面から離れるという行為。

ふと、宇宙を彷徨う星のことが頭に浮かんだ。

星々は互いに物凄い速度で遠ざかっているらしい。物理の授業で習った。

空なんかよりもよっぽど広い宇宙を、みんなして離れ離れになって。

寂しくないのかな。

悲しくないのかな。

切なくはないのかな。

遠い宇宙の果てを想像してみても、上手く実感が沸かない。何億光年先の孤独を夢想してみても、私はくしゃみなんか出なかった。

気づけば、もう随分高いところまで来た。

さっきのビルなんて米粒みたいだ。

思わず瞳から涙が出た。

綺麗に光るその雫は、ゆらゆら風に遊ばれながら大地へと降り注いだ。

そんな涙が羨ましかった。

重力に逆らった私とは大違い。

こんな力は要らない。

誰かと離れ離れになってしまうなんて、厭だ。

神様が本当にいるというのなら、私はきっと嫌われている。それとも、サイコロを振って悪い目でも出たのだろうか。

ぐんぐんと雲を突き抜けて昇ってきた。周りには広大な青ばかりが広がっている。

近くには誰もいない。当たり前だけれど。

ここはきっと空の墓場だ。

誰もいない。あるのは窒素と酸素と少しのオゾン。

ここで私の身体は、くると反転した。

「斥力」が消える。

懐かしい重みに引かれ、空と大地の曖昧な境界を越えて、私の身体は落ちていく。

頬を駆け抜ける風が心地良い。

このまま落ちていけば、私は確実に死ぬだろう。それでも良かった。

さっき落としてしまった涙を追い越せるかな。

空を逆走しながら、そんなことを考えると不意にまた涙が溢れた。

でも、これは悲しみの涙ではない。

ただみんなのところに帰れるという、嬉しさからの涙なんだよ。

虹

私の弟にはよく道に落ちているものを拾ってくる癖があった。

私はその度に注意をするのだが、弟は次の日には忘れて、当たり前のようにけろっとした顔で何かを拾ってくるのだ。

ある日の夕方、弟は虹を拾ってきた。

きらきらと七色に輝く虹は、見る者を魅了した。

「また拾ってきて。すぐに捨ててきなさい」

私は弟にそう言ったが、弟はかぶりを振って自室へと入ってしまった。

それからというもの、弟は虹だけを拾ってきた。

虹にも種類があり、七色の中で一番きれいに光っている色があったりする。それは虹によって様々だった。

ある時、私は弟に尋ねた。

「どうして虹ばかり拾うの」

弟は一言、

「きれいだから」

と言ったきり黙ってしまった。

結局、弟が何故あんなにも虹ばかり拾ってきたのかは分からない。

本当はもっと重要な意味があったのかもしれない。

でも、今となってはもうそれを知ることは出来ない。

泣き腫らした目の両親と、弟の笑顔の写真を見ると、弟が部屋に七色に光る虹を浮かべて私を楽しませてくれたことが頭にぼっと浮かんできて、私も急に泣きそうになった。

黒の森の中の銀の森

気がついたら馬鹿みたいに黒い森の中にいた、というのは良くある話だ。

夕食時の下らないバラエティー番組を眺めていて瞬きをした瞬間や、朝靄に霞む河原を散歩していて瞬きをした瞬間、または午後のつまらない授業をいかに乗り切ろうかと思案して瞬きをした瞬間に、私はふと黒い森の中に一人で佇んでいるのだった。

黒の森は、草も木の幹も葉っぱも枝も、全てが黒という色で出来ていた。

私はその森に瞬間的に移動してしまうのだった。

それは私にとっては良くある話だったから、たいした問題ではない。問題なのは今、目の前に銀色に輝く狼と蛇の中間の様な生物がいるということだ。

全てが黒で出来た森の中に、その異様な銀の生物がいた。黒一色の世界に似合わない、銀色。

月明かりが申し訳程度にその生物を照らしている。狼と蛇の中間の様な生物は、ひどく悲しそうな眼差しで、森の中の一本の木を眺めていた。

「良くないことというのは、たいてい続きますよね」

狼と蛇の中間の様な生物は、錆び付いた鎖を引きずるみたいな声でそう言った。

そうね、と短く返すと、彼は満足そうに頷いた。ぎょろりとした目が、忙しく動く。

「私はあの月から来たのです。然し、帰ろうと思っても、如何せん私には木すら登れません」

黒い風が吹いて、黒い葉がざらざらと揺れた。何か励ましの言葉でもかけてやろうとすると、私は元の世界に戻っていた。これもいつものことだ。ふとした瞬間に戻ってしまうのだ。ふとした瞬間に黒の森に飛ばされ、そしてまた、突然現実に戻ってくる。

今が化学の授業の最中だったことを思い出す。

机の上では、ガスバーナーに炙られたピーカーが暑そうに汗をかいていた。

蛇狼（狼蛇だと語呂が悪いので）と出会って数日後、ふとした瞬間にまた黒い森に私の身体はあった。

蛇狼はやっぱりまだ森の中にいた。ガリガリと爪の様なもので木の幹を引っ掻いている。辺りに黒い幹の破片が舞う。

「この黒さは貴女の黒さ」

相変わらずじやりじやりと砂浜の上にスコップで絵を描いたみたいな声。

私の黒さ？

「いつか、私は帰れるのでしょうか」

それは判らない。

薄い月明かりに目を凝らすと、蛇狼の身体の異変に気がついた。

彼の周囲には銀色に発光する草が生えていた。その中に一本、子供の木まで生えている。

いや寧ろこれは……。

「私はここで森になるようです。月に帰れず、銀の森になるのです」

そう。蛇狼の身体からもぷつぷつと芽が出ていて、本当に森にでもなるように思えた。

蛇狼の悲しさが、風に乗って伝わる。黒の森で一人（一匹？）で森になっていく悲しさが。

唐突に現実に戻された。

今は夕方。学校からの帰り道だった。

段々とこの世界にいた時の記憶が蘇ってくる。

意識と記憶がはっきりしてきても、あの銀色蛇狼がどうしているか気になって仕方がなかった。

次もまた逢えるだろうか……。

何故だか、少し涙が出た。

蛇狼のもとへ再び行くことが出来たのは、その数週間後。私はまた黒い森に飛ばされたのだった。

目の前には淡い白銀の森が繁っている。黒い森の中に。

蛇狼の面影をそこに見出だすのは難しかった。

風も吹いていないのに、胞子の様な銀粉がたくさん宙を舞う。

それは宇宙を彷徨う星に見えて、また蛇狼の魂の欠片の様にも見えた。

無数の銀が、ぼわぼわと黒の森の中で溢れていた。

ここには銀の森があるだけだ。

蛇狼はもういなかった。

月にはきっと帰れていない。

それから何ヵ月かが過ぎた。

あれ以来、私は黒い森に行っていない。望んで行ける場所じゃないのだから当然だ。

ふと見上げた夜空には、真ん丸の月がぽっかりと浮かんでいた。

その月を見ていたら、気がつけば私の身体は月に来ていた。

酸素があまりなくて息苦しい。

遠くの方で真っ白なウサギたちが餅をついているのが見えた。ぺったん、ぺったん、と餅の可愛い悲鳴が聞こえる。

見上げた宇宙には、地球はなかった。ちょうど月の裏側にでもあるのかも知れない。

その代わり、白く輝く星が見えた。

目を凝らしていると、それが銀色に光っているのが解った。

真っ黒い森で出来た星の中で、あの銀色の森が銀の粉を放って発光していた。

円形に成長した蛇狼のその身体は、まるで……。

「月みたい」

彼は月に帰ることは出来なかったけれど、月になることが出来たのだ。

地球上の誰も見ることの出来ない、私だけの月がそこに浮かんでいた。

私が地球に戻って、もう二度とあの黒の森や、この月に来られなくても、銀の月は光り続けるのだろう。

誰に見せる訳でもないのに、堂々と光り続けるのだろう。

ぼんやりとそんなことを考えていると、私の身体は地球に戻っていた。

ふうっと一息吐いて、空を見上げる。もう逢うことのない蛇狼に、ばいばい、と心の中で手を振った。